青春失恋記

太田治子

青春失恋記

太田治子

新潮社版

青春失恋記

●著者 太田治子 ●発行者 佐藤亮一
●印刷所 塚田印刷株式会社 ●製本所
新宿加藤製本●発行所 株式会社新潮社
郵便番号162番 東京都新宿区矢来町71
電話 業務部東京(03)266-5111 編集部
東京(03)266-5411 振替東京4-808番
昭和54年5月15日発行 昭和54年8月10日4刷
定価800円

© Haruko Ôta Printed in Japan 1979

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

〈青春失恋記・目次〉

青春失恋記……5
画家の肖像……173
あとがき……208

装画　伊藤真由美

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

青春失恋記

青春失恋記

《青春失恋記・目次》

赤いブーツの女(ひと) 7
白夜の街からきた男(ひと) 18
フリーウェイガール 32
マニラ湾の夕焼け 47
雨に消えたピーターラビット
おもいでの青い海辺 74
プールサイドに秋が 89
スクリーンの女 103
パパの恋人 116
早すぎた雪化粧 132
パーティの夜 145
春になれば 159

赤いブーツの女（ひと）

「今日もあのひとに会えるかもしれない」

と桃子は空を見上げた。昨日と同じ白いちぎれ雲が早春の風に吹かれている。伯父の山川事務所のあるビルを出て、あのひとが入っていった輸入雑貨の店まで二分とかからない。丸の内仲通りに面した店の中でも、その店のいぶし銀のように沈んだ光りを放つセピア色がかったショーウィンドウはひときわ印象的だった。ノーブルなスカーフやネクタイが、セピア色のヴェールのなかにさりげなく置かれている。

「あの店は、大人の店」と桃子は決めていた。もう二十七歳なのに、大人の女性と桃子は自分のことを思っていない。「結婚をした時、私ははじめて大人になれる」と考えている。それまでは、二十七歳の女の子なのだ。今も、女学生の制服のような紺に白い襟の洋服がいちばん好きだった。伯父の事務所に勤めるようになって五年になるのに、ずっとスウェーターにジャン

パースカートで通っている。
「いつまでたっても女学生のようでね。もう少しおしゃれをした方がいいと思うのだが、どうですかな」
先だっても応接室にお茶を持っていくと、伯父は学生時代の友だちに向ってそういって笑った。
「おや、またいつもの山川先生のおはこが始まりましたね」という友だちと一緒に桃子も笑いながら、実際伯父はこの頃それをいう回数が急に増えたと思った。桃子が適齢期を過ぎても、のんかんとしているのを心配していう言葉に違いなかった。「この子は変っている」と伯父は必ずそのあとでひとりごとのようにいう。
伯父は来客のない日は、せっせと古稀を迎えた記念に「回想録」の筆を進めている。
「どのあたりまでいきましたか？」
お茶をいれて持っていくと、伯父は、
「うん、うん」
と少年のようにはにかむ。そんな時の、伯父のきゅっとつぐんだ口許が桃子は好きだった。

伯父と桃子のパパは、ふたりきりの兄弟なのに随分違っていると桃子は思う。明治生まれと大正生まれ、十五も年が隔っているということだけではない。感じ方、表し方がまるっきり違

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

っている。感情を表に決して表さないパパ、伯父のようになればいいなと思うことがあるけれど、やはりパパは桃子にとってこの世でいちばん大切な男性だった。

あれは、高校三年の冬だった。演劇部の稽古を終えた後、演出家志望の国語の唐沢先生と神宮外苑から原宿、代々木の森と歩きまわって、夜の十二時近く渋谷松濤の家にたどりついた。門まで出てきたママは、

「無事だったのね」と静かな声でいった。

「ごめんなさい、ずっと唐沢先生と歩いていたの」

といいながら玄関を上がろうとすると、いきなりママは大声をあげた。ママがあの時何をいったのか、覚えていない。奥からでてきたパパに、

「この子、は、この子は」

といって、泣きだしたママを、桃子はぼんやり立ってみていた。ママの泣き声が、ずっと離れた所から聞こえてくるような気がした。

「遠い国へゆこう」

先生はそういって両手で、桃子の手を握りしめたのだった。熱い力のこもった手だった。あの時パパがママと一緒になって叱ったら、石段を駆けおりて先生の後を追っていたかもしれない。

「桃子はいい子だよ、とてもいい子だよ」

廊下で泣いているママに、そう言っているパパの声が桃子の部屋まで聞こえてきた。唐沢先

生は、三月の卒業式の直前にフランスに発った。もうお逢いすることはないような気がする。それだけに十七歳の年の暮、夜のなかを歩いた時のことを思うと今もなつかしく胸が痛む。パパにもママにもこのような夢のような思い出があるのではないだろうかと桃子は思う。

パパは戦地から帰って四年目の秋、ママと結婚した。戦前から勤めていた会社の、今は役員になっている。パパとママは、けんかしたことがない。我が家で大きい声を出すのはママと小犬のシロスケだけで、パパはいつも静かである。

「パパは、ファーブルのような昆虫学者になって、昆虫とお話している方がよかったんじゃなくて」

いつかママがパパにいったことがある。

家の中と外では、ジキルとハイドのように変る方もいるようだが、パパは会社でも同じだと桃子は思う。伯父は変る。事務所では少年のように元気なのに、家でパイプの手入れをなさっている伯父は無口である。

これまで桃子は、伯父と伯母の紹介で何度かお見合をした。その度に結婚しそうになったが結局話は流れた。つい二カ月前も、ママは大声をあげた。

「いい方なのに、とても感じのいい方なのに、男らしい方なのに、秀才なのに」

「桃子、ダージリンをいれておくれ」

桃子は救われたように立ち上がった。いつもこうしてパパは私を救ってくれる。紅茶を一口飲んで、
「おいしい」
というパパにママは、
「私だっておいしくいれられるのよ。いれないだけなの」
といった。
「ママの紅茶もおいしいよ」
ママはにっこりするといかにも満足そうに紅茶を飲み終えた。そして、
「桃子の理想のだんなさまは、パパなのね」
ママは更に、
「でも、伯父さまのようなタイプの方も桃子は好きでしょう?」
秘かに新劇女優になりたいと思い続けていた桃子は、大学四年になった時、伯父からパパとママに話していただこうと事務所へでかけた。桃子のいうことを伯父は、黙って聞いていた。
「卒業したら、私の事務所へきなさい」
といわれた。うむをいわせぬいい方に、桃子はその場でうなずいてしまった。パパからも誰からもそういういい方をされたことがなかった。もし独身時代の伯父から、
「おい、結婚しよう」
といわれたら、桃子は結婚していたような気がする。とはいうもののもし伯父とパパとどち

らがいいかと聞かれたら、
「パパ！」
と答える。パパの優しさに桃子はよく涙ぐむ。いつだったか、
「もっとおしゃれをして、男性をひきつけなくちゃいかんよ」
と伯父からパパの前でいわれて、ぶっすりした桃子に、
「桃子はこのままがいいね」
とパパはいった。
「君がいつまでもそんなことをいっているから、桃子は成長しないのだ」
伯父の強い口調に涙ぐんでいた桃子は、びっくりして顔を上げると、伯父と眼が合った。伯父は優しく、
「桃子はお父さんにそっくりだね。もっとママをみならいなさい。お見合の席でお父さんをひと目みて好きになったママは、その日のうちにどうか私と結婚して下さいとお父さんにお願いしたそうだよ」
このことは、ママからも何度も聞いていたことだった。ママのような勇気は桃子にはない。しかしそれでは、パパのような男性とは結ばれない、もっと積極的にならねばと、仲通りを眼を配って歩くようになった。パパのような感じの独身男性に会ったらその男性を尾行してどこの会社かを調べて、伯父にも相談した上で交際を申し込もうと心に決めた。しかし昼休みの仲通りですれ違う独身らしき男性はいつもグループで連れだって歩いている。

昼休みの時間を少しずらして仲通りにでたら、ひとり歩きの男性と出逢うのではないかと桃子は考えて、昨日初めて一時過ぎに散歩にでかけた。

下りのエレベーターは、桃子ひとりだった。九階の事務所まで毎日昇り降りする、エレベーターの中で、男性との出合いが生まれる可能性はある。渋谷から通勤している山手線の中でもないとはかぎらない。にもかかわらずいつからか桃子は、出合いがあるならそれは仲通りと決めていた。

ひとり歩きの男性の姿はみえない。「時間をずらしたぐらいで、そんなにうまく出合いが起る筈はないのだわ」と思うと、歩くのがつまらなくなり、すぐ眼の前の銀座のデパートの出店に入った。正面のショーケースには、外国製のハンカチが並んでいた。青いバラの縁取りのあるハンカチを桃子は手にしたくなった。

「これを一枚下さい」

「赤もございますよ」

という店の人の言葉に、出合いが生まれたら赤のバラのハンカチを買おうと思った。

店内のティーサロンは、ガラス越しに仲通りをゆく人の姿が見えるようになっていた。隅の席に座ってコーヒーを注文して、ふと桃子は、いつのまにか人と待ち合せる約束もないのにひとりコーヒーを飲めるようになっていたのに気付いた。学生時代には、コーヒーや紅茶は人と

向い合って飲むものと決めていた。店でひとりでコーヒーを飲む姿は、想像しただけでわびしいものだった。案外、パパとママがいなくなってもひとりで暮してゆくのかもしれないと考えながら、青いバラの縁取りを指先で撫でていると、ガラスの向うを、赤いブーツが横切った。黒いマントを羽織った髪の長い女性だった。一昨年ママと観たカトリーヌ・ドヌーブ主演の『赤いブーツの女』を思い出した。マドリッドの古い石畳を黒いマントをひるがえして歩いていた赤いブーツの女性が、仲通りを歩いている、そんな気がして桃子は立ち上がった。

店をでた時、その女性は舗道を横切り、セピア色のショーウィンドウの輸入雑貨の店に入るところだった。その姿に、恋人が描いた油絵の中へ手を取り合って入っていったラストシーンのヒロインの後姿が重なった。映画を観ているような気持で、桃子もすっと店の中へ入った。

赤いブーツの女性は、ネクタイコーナーの前で、

「これを見せていただけるかしら」

と尋ねていた。後姿をみつめながら、御主人はどんな方なのだろう、会社員？　それとも建築家かしらと考えた。

桃子は、入りたいと思って入れなかった店の中に今いることに気付いた。入ってしまえば、何んということはない、普通のお店だった。外からみていた時と同じように店の中全体がセピア色帯びていて、等身大の鏡に映っている桃子も不思議に大人びてみえた。

「これをいただくわ」

女の人は、水色と赤と黄色の流線が交叉したネクタイをかざしてみながらいった。カンジン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c